

Title	翻訳でH a m l e t を読めるか？
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	2010 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3797
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2010 年度

博士論文 【要旨】

(指導教員 新井明教授・有賀貞教授・山形和美教授)

翻訳で *Hamlet* を読めるか？

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

(博士後期課程)

学籍番号 106DC003

名前 鈴木 幸

博士論文【要旨】

(指導教授 新井明教授・有賀貞教授・山形和美教授)

翻訳で *Hamlet* を読めるか？

106DC003 鈴木 幸

本論文は、原文と翻訳の関係を親子関係ととらえるところから始まる。つまり、原文がひとつの存在である親なら、子供である翻訳もまた自身の個性を持つ存在であると考えられるからである。そこで、果たして本当に翻訳は「子供」として受け入れられるかどうか、ひとり立ちできる存在なのか、つまり翻訳の立場を明らかにすることを目的にして、考察を行った。

第1資料にはシェイクスピアの *Hamlet* を用いた。その考察の際には、*Hamlet* は第1四つ折本、第2四つ折本、第1二つ折本という主に3種類の原本があることから、そのうち *ōgood texts* と呼ばれる後者の2テキスト、*The Arden Shakespeare の Hamlet* (Ann Thompson and Neil Taylor, eds., 2006: Q₂) と、*Cambridge Updated Edition の Hamlet, Prince of Denmark* (Philip Edwards, ed., 2003: F₁) を使用して、比較・対照のためのテキストとした。また、日本語訳テキストに関しては、*Hamlet* は現代に至るまで60人以上の翻訳者によって翻訳されてきたが、その中から、坪内逍遙訳(1933年)、竹友藻風訳(1948年)、福田恒存訳(1955年)、小津次郎訳(1965年)、小田島雄志訳(1973年)、松岡和子訳(1996年)、河合祥一郎訳(2003年)、大場建治訳(2004年)を中心に扱い考察を行った。

第1章「翻訳について」では、テキスト間の検証を始める前に、翻訳とは何であるか、原文をどのように読むか、原文と翻訳とを比べる際にはどのようなことを考慮する必要があるのかといった、翻訳を理論として見たときの問題点を探ることで、翻訳に対する問題意識を高めることを試みた。翻訳者が最初に行うことは原文を読むという作業である。それも、細かく読むこと、解釈することが求められる。しかし、読むこと、そして翻訳することには限界が生じる。それは、翻訳は人間に必要なだが失敗は避けられないと言われてきたことと通じる。とはいえ、翻訳者の役割、翻訳者が目指す翻訳、等価や規範を考慮することで、翻訳は時には暴力的な力を得て、無理を通すこともできるようになる。そして、

その力は、最後には補償という態度で償われる救いがあることについて検討した。

第2章「*Hamlet*を読む」では、原文を読むことに焦点を当てて、*Hamlet*とその日本語訳テキストを扱って考察した。異なる翻訳者による翻訳は、やはり個々なるものである。その違いは、読み方の違い、解釈の違いが関係してくると考えられる。そこで、*Hamlet*の有名な第4独白「To be, or not to be, that is the question」とその翻訳が、復讐説、自殺説、一般論説に分かれること、そもそも*Hamlet*という登場人物は、繊細であったり、憂鬱性であったり、魂が病んでいると考えられてきたこと、*Hamlet*の苦痛はどこから生じているのか、そして復讐遅延説へとつながっていく過程について、*Hamlet*の7つの独白から考察した。その際には、原本が複数あるという事実も考慮し、様々な解釈を知識と踏まえること、つまりは作品を読み込むことが、翻訳をする第一歩であることを確認した。

第3章「*Hamlet*の言葉から」では、*Hamlet*を特徴づける性質のひとつであると言われる言葉づかいに注目して、翻訳の可能性に関する考察を行った。*Hamlet*の言葉遊びには、言葉を繰り返す、強調する、同義語を続ける、質問攻めにする、ダジャレを言う、といった特徴が見られる。これらを主人公の習慣と呼ぶならば、翻訳においても伝わってほしいものである。そこで、8つの訳を比較したところ、約8割にそういった言葉遊びが確認できた。しかし、そもそもテキストの一部として言葉遊びを捉えた場合には、完全な等価というよりは、日本語としてのリズムといった、つまり文学における美が求められることもあること、読み方によっては言葉遊びの意図を受け入れないこと、また誇張して捉えられることもある。それでも、翻訳者の努力と工夫から可能性が生まれること、人に伝えるという翻訳者の立場、そして登場人物の目線を大切にしたい読みが求められることが観察された。

第4章「*Hamlet*目線から」では、*Hamlet*の7つの独白と「尼寺の場」を加えた8か所から、原文と翻訳、そして翻訳同士を比較し、*Hamlet*という人物像にどのような相違がみられるかを観察することで、翻訳が原文という親から離れたひとりの子供として存在するかどうか、検証を試みた。その結果、それぞれの翻訳には、区切りによるリズムの違いや、省略や追加の表現があること、比喩や宗教的な表現が日本文化に沿った表現に変わっていることもあること、原文が透けて見えるような訳があるかと思えばその逆もあること、そ

これらの表し方によっては分かりやすくも分かりにくくもなること、といった特徴と、特に翻訳同士を比べることで、そのニュアンスが違って読み取れること、つまり、それぞれの翻訳にそれぞれの **Hamlet** 像が見られることが確認できた。それは、そもそもの翻訳の目的、翻訳された背景にある規範、時代といった要素の違いに加え、翻訳者それぞれの解釈が見られるからであると考えられた。

原文を読み、解釈するということは、訳語をひとつひとつ選ぶことにも影響を与えると考えられる。というのも、原作者が原文に残した思いを受けとめることで、翻訳者も同じように緊張を持つことができるからである。原文と翻訳を比べることで、差が生じることは避けられないことなのかもしれない。しかし、その差でさえも、緊張と責任をもって選択していった言葉であると捉えれば、それは翻訳者としての忠義的態度の表れであり、改めて「補償」が含まれた結果として現れる、と思われるからである。

終論では、原文と翻訳との間に差があるように、翻訳と翻訳との間にも差が生じていたことから、翻訳の存在意義について改めて検討した。そのような差は、翻訳者同士がお互いを意識していたこと、つまり、それまでに存在する翻訳テキストを参考とすることで、少しでも違った訳を、自分なりの目標を持った訳を試みようとした結果であること、そして、背景にある規範が関係していることの表れであると言える。

そのようにしてみると、やはり最終的には、翻訳者が **Hamlet** をどのように捉えているか、が問題になってくるようだった。それは、ひとりの読者としての翻訳者の解釈から生じた、**Hamlet** 像である。そして、私たち読者がその翻訳を読んで感じることも、それこそ人によって異なるのである。翻訳を読むにも、人それぞれなのである。

それならば、やはり、読む対象として用いられる時点で、翻訳もまた、ひとつのテキストである。翻訳は原作の子供であり、その子供として、自らの意見を持った、自らの声で、私たち読者に語りかけるのである。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 106DC003

名前 鈴木 幸